

グリム昔話集にみられる呪い

著者	小沢 俊夫
雑誌名	東北ドイツ文学研究
巻	5
ページ	1-8
発行年	1961
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133447

グリム昔話集にみられる呪い

小 沢 俊 夫

グリム兄弟の編集になる昔話集^{註1)}には200篇の昔話がおさめられてあり、そのなかにはまま母話、末子成功話などいろいろな型の話がふくまれているが、それらに共通するモチーフとしてしばしばあらわれ、かつ昔話の特徴的なものと思われるものがいくつもある。ここに調べようとする *Verwünschung* もその一つである。呪いとそれからの解放、死とそれからの蘇生などは異教時代の信仰的背景をもつものであるが、ここでは19世紀の前半に採集され、KHMにおさめられた昔話においてそれがいかなる形であらわれ、いかにあつかわれているかをみようとするものである。

はじめにここにあつかう、KHMにおけるすべての呪いの件を列記しておく。

Nr. 1 Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich ; 4. Märchen von einem, der auszog, das Fürchten zu lernen ; 9. Die zwölf Brüder ; 11. Brüderchen und Schwesterchen ; 12. Rapunzel ; 15. Die sieben Raben ; 49. Die sechs Schwäne ; 50. Dornröschen ; 60. Die zwei Brüder ; 62. Die Bienenkönigin ; 85. Die Goldkinder ; 88. Der singende springende Löweneckerchen ; 92. Der König vom goldenen Berg ; 93. Die Rabe ; 97. Das Wasser des Lebens ; 99. Der Geist im Glas ; 106. Der arme Müllerbursch und das Kätzchen ; 108. Hans mein Igel ; 111. Der gelernte Jäger ; 121. Der Königssohn, der sich vor nichts fürchtet ; 123. Die Alte im Walde ; 127. Der Eisenofen これには二件の呪いがある ; 133. Die zertanzten Schuhe ; 135. Die weiße und die schwarze Braut これには三件の呪いがある ; 136. Der Eisenhans ; 144. Das Eselein ; 161. Schneeweißchen und Rosenrot ; 163. Der gläserne Sarg ; 169. Das Waldhaus ; 193. Der Trommler ; 197. Die Kristallkugel. 以上 31 篇 34 件である。

次にこれらの呪いについて調べる問題点を順にしたがってあげておく。

1) 呪いの内容的分類。2) 呪いをかけられるのは主人公か非主人公か。3) 呪いをかけられる事件が物語のなかのどのべられているかどうか。4) 呪いの方法および、呪いをかけられる理由。5) 呪いをかけられている間の人間界との交流、主として言葉について。6) 呪いをかけられている間の滞在地。7) 呪いからの解放について。

1) 呪いの内容的分類。変身させるものがもつとも多く 22 件ある。そのうち、他の

1) Kinder-und Hausmärchen, Gesammelt durch die Brüder Grimm, hrsg von Friedrich von der Leyen 1942 以下 KHM と略す。

姿の人間への変身3件 (Nr. 136, 169, 193)。動物へが14件 (Nr. 1, 9, 11, 25, 49, 88, 92, 93, 99, 106, 127, 135, 144, 161)。石化3件 (Nr. 60, 62, 85)。動物になったり木になったりするものが1件 (Nr. 123)。verwünschte Prinzessinとだけあるのが1件 (Nr. 97)。次に変身ではなく眠りにおとすもの3件 (Nr. 50, 111, 163)。顔を黒くしたり眼をくもらせたりという身体一部の変化が3篇4件 (Nr. 121, 135 これに2件, 197.)。ストーブと塔の中への閉じこめが各1件 (Nr. 127, 12.)。次に生れながらにして変身しているもの2件 (Nr. 108, 144.)。これはいわゆる異常出生話である。最後に、夜になると怪しいものが出るという呪いが1件ある (Nr. 4)。

2) 次に呪われているのは主人公か非主人公かをみると、非主人公のばあいはわずかに5件 (Nr. 127, 135. これに2件ある, 99, 133.) で、主人公29件である。しかも非主人公5件のうち Nr. 127 と 135 では、物語の中心話題である主人公の呪いがあって、その附随的なものとしてごく簡単にあつかわれているにすぎない。それらは昔話の筋を動かしていく契機となるものではあるが、それ以上の興味をうることはできず、すぐに忘れられて一言も言及されなくなってしまう。„主人公以外のものは、登場しても役目が終るとすぐ忘れられてしまう” という KHM の一般的特点がここにもうかがえる。そういうわけで、以下のべていく呪いの事件は主として主人公におけるものである。

さて、その主人公が呪いをかけられる29件全体をみてまず気がつくことは、呪われた主人公はやがてかならず救われるということである。その救いの方法はあとでみるとして、とにかく主人公にかぎり、呪われたままではないことがはっきりしている。そのことは、さきに調べた昔話における死のあつかいかた註²⁾において、主人公の死は、その死自体が物語の主内容（たとえば唄い骸骨型のごとく）でないかぎり、かならず蘇生があるという結論がでたのとまったく同じ性格を示しているのである。それは、昔話には悲劇的なものは求められていないと言えるであろう。

呪いをかけられている者と、救う者との関係は、兄と妹 (Nr. 9, 25, 49), 兄と弟 (Nr. 60, 85.), 妹の夫 (Nr. 11), 妻の父 (Nr. 144) などもあるが、こうした肉親関係以外のばあいには、両者は救出の後、かならず結婚している。昔話は主人公の幼年期から青年期までの青春物語であるといわれるが、ここにもその一端がみられる。

3) 次に34件の呪い全体についてみると、呪いの事件が昔話の中にあるものと、すでに呪われた姿で昔話中に登場するものとの二つのばあいがあることがわかる。数でいうと、すでに呪われた姿で登場するもの19件、昔話の中で呪われるもの15件とわかれている。呪いの事件の有無がこうにわかれていることは興味あることなので、各グループについてすこし詳しくみていくことにする。

呪いをかけられた姿で登場するグループについてただちに言えることは、それらの昔

2) „グリム昔話集にみられる死の扱い”；「東北ドイツ文学研究」第2号 1958年所載。

話は呪いという魔術的行為をのべんがためのものではなくて、呪われているものをいかにして救うか、いわゆる *Erlösungsmärchen* であるということである。そこでは、誰によって、いかにして、あるいは何故に呪われたかという興味は感じられず、ただ彼らが呪いから解放される経緯への興味のみがはたらいているのである。それらの中には、事件がなくとも間接的に言葉あるいは事情で、誰によって呪われたかわかるものもある。それは5篇(Nr. 1, 123, 161, 163, 169)にみられることであるが、それとてもと簡単にしかあつかわれていない。しかもほとんどのばあい、救出されてから、じつは私はこれこれの人に呪われたのですとのべるのであって、それまでは昔話の聞き手たち、読者たちは何も知らずに筋の動きそのものに興味をむけているのである。これ以外の14篇ではその点にはまったくふれていない。これらのことから、昔話への興味が、呪いをかけること自体ではなく、呪われている者が解放される経緯にむけられていることがわかる。そしてこのことは、呪いの事件が物語の中にあるばあいでさえやはり同じ事情にあるようだが、それは後にふれることにする。さらにこのことは、この小論の主題からはそれるが、呪いとかがざらず一般に主人公が苦境におちたときにもみられる特徴である。すなわち、なぜに、またどのような経過でそうなったかということよりも、どのようにしてそこから脱出するかが聞き手たちの興味の中心であったようである。

ではその救出のための条件は表面にでているかどうか。呪われている者が知っているのが14件。そのうち、救い手にあらかじめ話しておくのが6件(Nr. 4, 92, 121, 163, 193, 197)。のこり8件というものは、救い手は条件はおろか、相手が呪われている人だということも全然知らないで行動していたわけであり、ある無意識的行為によって突然救ってやることになるのである。その後ではじめて、呪われていたのだということを聞くわけで、それがさきにあげた5件なのである。

このようにこまかい点になると、元来口承文芸である昔話には明確に分類しえないものがでてくるのは当然であるが、その点の詮索はここではさしひかえるとして、とにかく昔話の主人公たちは自分の知らない目的へとむかって、意志するとしないとにかかわらず、しかもあらゆる抵抗を排除して進んでいき、呪われていたものを、自分では知らないうちに救いだしてしまう。そのことも、さきにのべたように昔話の聞き手たちが、動機や結末に対してよりも、途中の過程の波乱そのものに対して興味をもっていたという事情からくるのであろう。つまり主人公への圧迫的な諸力が凝集して呪いという形で直接主人公におおいかぶさってくるその過程には興味はあまりむけられず、凝集したその圧力を解いていく過程にもっぱら興味はむけられ、そこに重心をおいて語られているのである。それは主人公への圧力はさげがたいものとして聞き手、語り手の意識の中にあることからくるのではなからうか。聞き手や語り手が期待しうることは、その力を避けることではなくて、おおいかぶさってしまったものを解いて、それから脱出することのみなのではないか。すなわち、事件の背後に人智のおよばないある力、運命の意志というようなものを予想しているのではなからうか。そして本人にさえ理解しえないこと

でも、それがその意志にかなうものであれば開放が成就されると考えられているのではないだろうか。そして話し手の気持と聞き手の気持が接近していたであろう口承の間に昔話にしみこんだ、民衆の素朴な運命観とでもいうべきものが感じられるのである。

次に、呪いの事件が昔話の中に読まれる 15 件について。これらが今までのべたものとことなる点は、もちろん、呪いの事件があることであり、聞き手、読者の関心は一応は、主人公が誰に、何故、いかにして呪われたかという点にむけられているのである。しかしよくみると物語の重心はその点にはなくて、やはり呪われてから解放にいたるまでの迂余曲折にあるといわざるをえない。たしかに、たとえ 50 番 *Dornröschen* では王様の催した祝会、それに招かれなかった 13 番目の *weise Frau* による呪いがのべられてはいるが、これはもっとも詳しい例であって、その他のものでは、救いだすための努力をのべた部分にくらべてごく簡単にしかあつかわれていない。また、この中にはままだ母話が 4 篇 (Nr. 9, 11, 49, 135) ふくまれている。そこでは呪いをかけるという事件はままだ母の残酷な性格、昔話ではしばしばままだ母は魔女的に考えられがちであるが、その魔女性を特に示す役目をもっているわけである。しかしだからといって特に詳しく描写されているわけではない。

次にさきほどの呪いの事件のないグループのばあいと同じように、解放のための条件を知っているかどうかをみると、呪われた者のみを知っているのが 3 件 (Nr. 108, 127, 135)。全然言及されていないで、誰も条件を知らないと思われるもの 2 件 (Nr. 11, 50)。つまりこの 5 件では、やがて解放する人自身は条件を知らないのである。

KHM では何かを知っているのに行動しないということはない。単なる知識はない。かならずそれを行動によって体験する。そのことがこの呪いからの解放についても妥当する。すなわちこの 5 件以外の 10 件 (Nr. 9, 12, 25, 49, 60, 85, 93, 135 これには 2 件ふくまれている, 144) では、救うための条件を知った者はかならずそれにむかって行動していくのである。では条件を知らないこの 5 件では、解放する人の意志はどうだったかとみると、さきのグループのばあいと同じくここでもやはり、まったく知らずに行っている行為であるのに、それが呪いからの解放をもたらしていることがわかる。

4) 呪われたことがわかるばあい、呪いをかける主体、方法、原因について。ままだ母話では当然ままだ母が子供に呪いをかける。これはさきにのべたごとく、魔女性の強調として昔話にはふさわしいものである。しかし、たとえば 9 番では妹が庭のゆりを折ると 12 人の兄たちが鳥になって飛んでいってしまう。つまりあきらかに人間界に属すると思われる主人公たる妹が、それを知らずにした行為で兄たちに呪いをかけてしまったというわけであるが、これに類したものは多く、25, 93, 108, 144 番にある。25, 93 番では父親または母親が思わず叱ることによって動物に変身してしまい、108, 144 番では子供をほしいあまり、どんな子供でもいいと思うことによって、生れた子供は半獣半人であったというわけで、いずれも肉親が悪意でなく言ったことが呪いとなって実現されてしまうのである。その他呪いの仕方は、50 番ではあの 13 番目の *weise*

Frau が宣言するし、60 番では魔女が鞭で叩いて変身させ、85 番でも魔女の怒りにふれて石化されてしまう。

こうみえてくると、魔女的なまま母が呪いをかけるのはうなずけるとして、興味あることは、肉親たちさえもが、しかも意識的にでなく呪いをかけることがありうるという点である。呪いはかならずしも主人公に敵対する存在からくるとは限らないわけである。ここにも、さきに解放について指摘した、かくれた意志への民衆の従順、民衆の運命観がしみこんでいるといえよう。またたとえ魔女であっても呪いの方法はなんら特別の儀式ではなくて、ごく普通の行為、ゆりを折る、叱言を言う、鞭で叩くというようなものでしかない。昔話に登場する彼岸の存在、小人や魔女は、人間と共通の言葉を話し、人間社会の中へ入ってくる、つまり彼岸の存在と比岸の存在の間には自由な交流があるのだが、このばあいには、人間が彼岸的能力をもっているという意味で、また、ごく日常的な行為が彼岸的効力をもつという意味で、やはりそこに交流があるといえるのである。

それら呪いの記述の仕方をみると、それは儀式、方法、心理的背景などはいっさい説明しているものではない。ひとり言が呪いをかけることさえある。そこで „昔話のなかでは、呪いの行為があったことが指摘されさえすればいい。それは描写される必要はない” と言えるようである。そして昔話という構造における呪いの機能は、次の行動をひきだすことにあるようであり、次の行動とはすでにのべたごとく、呪いの主体や方法をさぐるのではなくて、意識しているといえないとにかかわらず、呪われた人の解放へとむかっていくものなのである。

5) 呪いをかけられている間の、人間界との交流、言葉について。たとえば 1 番 *Froschkönig* では、蛙が王女にむかって、約束どおり一緒に御飯をたべさせるとか、一緒に寝かせるとか言うが、そのとき、蛙の言葉は王女に通じている。これに類したもの、すなわち動物に変身されたものが、人間と話すばあいにはすべて、互いに言葉が通じあう。異常出生話で、生れながらにして動物になっていても言葉は通じる。これらは数にして 14 件 (Nr. 1, 11, 25, 49, 88, 92, 93, 99, 106, 108, 127 これには 2 件の呪いがあるがそのうちの、王子が蛙になるばあい、135, 144, 161) ある。その他、身体一部の变化や塔の中への閉じこめなどではもちろん言葉は通じており、(Nr. 4, 12, 121, 127, 133, 135 これには 2 件ある、136, 169, 193, 197) 総じて 25 件に言葉の交流がある。交流のない 9 件のうち 7 件は、50 番 *Dornröschen* のごとく眠りにおちいつている。あるいは 62 番 *Bienenkönigin* のごとく石化されてしまっていて、これらは言葉を全然発しない。何か言葉らしきものを発するが人間には通じないという例はない。言葉を発すれば通じる、あるいは全然発しない、そのどちらかである。ここに中間的現象が二例ある。123 番 *Alte im Walde* では主人は時間によって鳩になったり木になったりするが、鳩である間のみ人間の言葉を発する。163 番 *Der gläserne Sarg* では、呪われて眠りにおちいつていた貴族の娘が、救い手である裁縫師が近づくとぱっと眼をさまして自分の運

命を語ってきかせる。これらの例をみえてくると、奇想天外な、不思議なことが平然とあらわれる昔話のなかにあつて、鳥や獣が人間の言葉を発することはいささかも抵抗を感じずに受けとられているのだが、石や木はついに言葉をもちいることがなく、眠っている人間もしやべりだすことはないといえるのである。中間的な例としてあげたばあいでは、眠っていた姫が自分の運命を語りきかせるためには、彼が近づいてきたときに、突然眼をさまさなければならぬ。ここで昔話の不思議は、眠っている人が話すというかたちではなくて、眠っていた者が救い手の接近とともに急に眼をさますかたちであらわれているわけである。眠っている人が話す不思議、あるいは石や木が話す不思議は許されない不思議だが、眠っている人が救い手の接近とともに眼をさます不思議、あるいは鹿や鳥に変身させられている人が話す不思議は許される不思議だったといえることができる。ちなみに呪いと限らず一般に KHM では動物が話すことはしばしばあるが、植物や鉱物が話すことは決してない。人間の睡眠中も同じく決して話さない。

6) こまかいことだが、呪いをかけられている間の滞在地についての記述を調べてみると、単に森の中または森の中のどこというものが多く、15件ある。次に多いのは城の中でこれは8件。そして城の中というときには森については一言も言われていない。口伝という伝承様式では、勝手にいろいろなものが入ってきそうに思えるがこの点は画然と区別されている。

7) 呪いからの解放について。救い手と解放の条件との関係から三種に分類される。第一に、救い手に積極的意志があつて解放のための条件を聞きだすばあい。第二に、救い手には元来救う意志があつたわけではないが、呪われている者から条件を教えられて知る。第三に、条件をぜんぜん知らず、無意識な行動が解放をもたらすばあい。

第一のグループに属するもの、たとえば49番では7年間、話しても笑ってもいけない。その間に兄たちのために、はこべでシャツを作らなければならないという条件を伝えるのが兄たち、すなわち呪われている者だが、9番のように突然ある老婆があらわれて告げるばあいもある。このグループに属するものは8件(Nr. 4, 9, 49, 62, 92, 106, 121, 193)あるが、いずれも明確に課題が与えられ、それにむかつて積極的意志をもって進むのが特徴であり、物語としての興味は、その積極的意志をもった人がいかにして目的をはたすかにある。それゆえその課題は、三晩責苦にあつても声をださない(Nr. 92)などの困難なものばかりであり、それを遂行するのは肉親とか特に志願した者である。

第二のグループに属するものは6件(Nr. 88, 93, 99, 127, 163, 197)。たとえば93番 Die Rabe では母の思はず口にした言葉で Rabe になった一人娘は、森の中を歩いてきた一人の見知らぬ男に「私は王女ですが呪われているのです。あなたは私を救うことができます」と言い、その方法を具体的に教える。男の方でもべつに驚きもせず、教えられた方法を厳しく守ってついには救うことになる。もちろん初めはその意志はないのだが、いったん救いする方法を知るとかならずそのために行動する。単なる知識はないという特徴はさきに指摘したとおりである。しかもこのグループのばあい、初めはいやいや

やながらでも (Nr. 99, 127), 後にはむしろ好意をもって救ってくれるのである。救いの条件の内容は第一のグループほど困難なものではなく、それを遂行する人はそれまでは面識のなかった人である。そして解放に到達するまでの興味はここでもやはり、未知の人だったにせよとにかく条件を意識して行動することにそそがれているが、次の第三のグループでは、無意識な行為がたまたま解放の条件をみたし、救いだすことになる。代表的なものは1番 Froschkönig で、王女は蛙にベッドと一緒に寝かせてくれと言われ、ついに怒り、蛙を壁に力いっぱい投げつけるが、それによって蛙は美しい若者になるというわけである。ここでは無意識であるばかりか、憎しみをさえもっている。動機はたとえ憎しみであっても、その行為がかくされている救いの条件をみたしさえすれば、解放は成就されるのである。その他このグループに属するもの5件 (Nr. 108, 123, 135, 144, 169) である。悪意からではないが、169番では末娘の親切なおこないが救いをもたらして、いわゆる末子成功話となっている。これらのばあいの主たる興味は、何も知らない人が何も知らないまま行動して突然解放を成就する点にあったのであろう。そしてその条件は第一のグループとは逆で、なんら特別な行為ではない、ごくあたりまえな行為なのである。

さて以上の三分類のどこにもいれることのできないものもある。50番 Dornröschen で、救い手となる若者は、たまたま彼女のことを聞いて、美しいその人を見たさに茨の中に入っていく。そして幸運にも、眠っている彼女を発見してあまりの美くしさに口づけをすると彼女は眼をさまし、救われるのであるが、その日はまさしく100年がすぎさった日であったと書かれているので、口づけがなくとも眼をさましたのかもしれないが、それほど論理的に確実に整理されていないのは昔話らしいところであろう。とにかく彼がある老人から聞いたことは、美しい王女が茨の中の城で眠っているという伝説であって、救うための条件ではなかった。この例はさきあげた第二と第三のグループにまたがっているようである。

さて以上でだいたいのはつきるが、呪いぜんたいについて少し補ってみる。まず主人公と彼岸者との間の呪ったり呪われたりする関係を整理すると、彼岸的存在は呪いをかけるだけであって、呪われること、人を呪いから救うこと、自分が救われることなどはない。それに対して主人公には呪われる、救出する、救出されるの三つのばあいが可能であり、呪うことは決してない。しかし呪いをかける主体は彼岸的存在とは限らず、主人公以外ならば、つまり父や母、妹などあきらかに人間界に属する人物が知らずして呪いをかけることがある。そして人間に呪われたばあいにも、とにかくいったん呪われてしまうと彼岸者に呪われたばあいとまったく同じ結果となり、その解放のための苦労も同じ苦労が要求される。一般に、いったん呪われると一定の時間が経過するあいだ、救い手となる人物または呪われた者自身が解放のために活動するわけであるが、そのばあい活動するのは両者のうちのどちらかのみであって、両者とも動きまわることはないし、両者とも動かずにただひたすら時間の経過を待つということもない。また解放のた

めに諸人物がいかに努力しても、あるいは肉親や花嫁がいかに心を痛めても、ある一定の時間が経過しなければ解放されることはない。しかも経過すべきその時間とは、さきさま母話を例として指摘したごとく³⁾、実は主人公の周囲においてのみはたらいっているものであって、主人公そのものは時間の流れの外にあってその影響を受けていないのである。たとえばそれは100年間の眠りにおちた茨姫をみればあきらかであろう。

時間のみではなく、呪いそのものの効力も、じつは呪われた者の内的なものへはいささかも影響を及ぼしていない。姿を変えられ、あるいは地理的遠隔の地に移され、一定期間隔離されはするが、呪いから救われれば以前とまったく同じ姿、同じ人物、しかも呪われた時と同じ年令にもどるのである。そして周囲の人々もそれを不思議とは思っていない。茨姫が眠りにおちたとき城ぜんたいも眠りにおちるが、王女が眼をさますと、かまどの火は燃えはじめ、壁の蠅は動き出すというぐあいである。

また救いに行つて失敗した人もいるわけだが、それらについては全然ふれないか、ごく簡単に数語をもってふれる程度である。そして、かくのごとく不思議な呪いと解放の昔話ではあるが、救い手は、呪われている者の居る場所へ地理的に到達しなければ救うことはできないのである。遠隔の地から神通力ごときのものであるということは決してない。そしてその呪われている者も、救い手の属する人間界と、精神的にも地理的にもじつは同一の平面に立っているのである。それを口承文芸としての昔話の筋の運びかたからみれば、同時に二場面を聞き手たちの眼前に話して描き出すことは、話のエネルギーを分散させ、聞き手の注意力を弱め、したがって物語として耳から訴える力が弱くなるので、そうした伝承様式からくる制約もはたらいていたと考えられるのである⁴⁾。

(本稿は日本独文学会 1958 年度秋季研究発表会——北海道大学——において発表した原稿に加筆訂正したものである。)

- 3) “グリムさま母話における時間と空間”；「文化」23巻4号 1960 東北大学所載。
- 4) “さま母話における主人公と話の筋”；「東北薬科大学紀要」第7号 1960 所載。